

ニザームッディーンとアミール・フスロー

イーシャ・サーデサイによる再話

何世紀も昔のインドに、その英知、恩恵、寛大さ、そして人々の人生にもたらす奇跡で知られたスーフイーの師がいました。彼の名前はハズラット・ニザームッディーン・アウリヤーといい、スーフイーの聖人たちのチシュティー教団に属していました。

ニザームッディーンは、デリーの外れにハーンカーを設立していました。ハーンカーとは精神的リトリートをする場所で、あらゆる身分の人々が身体と魂に滋養を得るために訪れる、緑豊かで静かなオアシスでした。偉大な聖人に敬意を払おうと、毎日何百人もの信奉者が訪れました。彼らは何時間も、時には何日間も、ニザームッディーン・アウリヤーの神聖な面前で時を過ごしました——教えを受け取り、ささげ物をし、そして彼にささげられた食物から用意された豊かな食事を楽しむのでした。

ある穏やかな朝、ニザームッディーンがベランダに座り、アラー——神——に祈りをささげていた時、一人の男がハーンカーの中庭に入って来るのが見えました。男は猫背で、頭は低く、人生で多くの困難に耐えてきたかのように疲れて見えました。衣服は汚れて破れ、体からだらりと垂れていました。

男が顔を上げると、ニザームッディーンと目が合いました。すぐさま男は聖人の所に走り寄り、その足元にひれ伏しました。「おお、師よ！」と、彼は言いました。その声は疲れ果て、明らかな絶望感が漂っていました。「おお、師よ！」

ニザームッディーンはミスバー、祈りの数珠を、彼の隣にある祈り用の敷物の上に置きました。

「言いたいことを、言ってごらん」。とても優しい口調でした。

「おお、アウリヤー」と、男は震える声で言いました。「おお、アウリヤー、あなたの恩恵、メヘルバーニーが必要です。というのは、私には結婚適齢期の3人の娘がいるのです。皆、善良でよく働きます。でも私はただの農夫で、しかもつきに見放されています。ご存じのように、持参金がなければ、嫁に欲しがる求婚者などいません。私はできる限りの努力をしました。できることは何でもしました——でも、いまだに持参金を用意することができません。時間ばかりが過ぎ、貧窮どころか絶望的です！ 行く所もなく、頼れる所もありません」

男は言い募りました。「私がすべての望みを諦めかけた時、おお、アウリヤー、あなたの信奉者の一人があなたのことを教えてくれたのです。彼らは、あなたの偉大さ、慈悲深さ、寛大さについて話していました。ですから、あなたのメヘルバーニーを受け取るために、遠路はるばるやって来ました。おお、どうかあなたの優しさを私に授けてください」。彼は尊敬を込めて頭を下げました。

ニザームッディーンは、貧しい農夫の懇願を熱心に聞きました。「よろしい、助けてあげよう」と、彼は少しして言いました。「多くの裕福な人々が、精神的な英知と内なる目覚めを受け取るためにここに来る、そして彼らはいつもささげ物を持って来る。3日間私と共にいることができるかい？」

「はい、はい、それはもう、何でもします！」と、農夫は言いました。

「では今日から3日間、人々が私にささげた物は、すべておまえが持って帰りなさい」と、ニザームッディーンは言いました。

農夫は目を見開きました。「何という信じられない祝福だろう！」と、彼は思いました。「何という慈悲深さだろう！ ニザームッディーン・アウリヤーは、ただの農夫の私に、人々が彼にささげた物をくれるというのだ！」感謝の気持ちで心をいっぱいにして、彼はニザームッディーンの近くに座り、そして待ちました。

1時間がたちました。そして2時間。ついに1日が終わろうとしています。でも誰一人、ニザームッディーンのディーダール、彼のダルシヤンを受け取りに来ません。誰一人、ささげ物をしに来なかったのです！

ニザームッディーンは、農夫を優しいまなざしで見詰めて言いました。「まだ明日がある」

ですから翌朝、ニザームッディーンがベランダにある席に着いて祈りを始めると、農夫は戻って来てそばに座りました。彼は聖人と一緒に祈りました。辺りは静まり返っていました——聞こえるのは遠くの鳥の声のみでした。朝日が空を着実に昇りました。

またもや、丸一日が過ぎても、ニザームッディーン・アウリヤーの祝福を受け取りに来るものは誰一人としていませんでした。夕暮れになると、ニザームッディーンは農夫の方を向いて、「まだ明日がある」と言いました。

3日目の朝、ニザームッディーンは再びベランダの席に着きました。中庭の木々は青々とし、花々は格別な香りを放っていました。木立の間を日光がこぼれ、まだらな光の中で、ニザームッディーンの姿は一段と輝いて見えました。ハーンカーの雰囲気は、この日は違うように感じられました。なぜかより特別で——より色鮮やかで、この世のものとは思えない美しさで躍動していました。

それでも、現状は変わりません。新しい訪問者はありません。新しい探究者も。新しいチェーラス、弟子も。信奉者も人々も巡礼に来ません。ただの一人も来ませんでした。

農夫は完全に当惑しました。とどまるように言われた3日間、贈り物も、お金も、いかなるささげ物も、ニザームッディーンにありませんでした。彼は信じられませんでした。ここ、ハズラット・ニザームッディーン・アウリヤーのハーンカーの中でさえも、彼のひどい不運が続くなんて。彼のマインド——彼の全存在——が動揺していました。「いったい俺がどんな悪いことをしたと言うんだ？」彼は思いました。

農夫はニザームッディーンの方を向きました。苦悩がはっきり顔に刻まれていました。「おお、師よ！」と、彼は言いました。「私は思っていたよりずっと貧窮し、呪われています。3人の未婚の娘を持って、どうやって生きていけばいいのか分かりません。でももう行かなければなりません。どうかおいとまさせてください」

ニザームッディーン・アウリヤーは言いました。「誰もが自分の運命を持って生まれている。おまえは3人の娘が結婚するよう取り計らわなければならない。そのために必要な物を——そしてそれ以上の物を——受け取るための、正しい場所におまえは来た。しかし私は世捨て人だ。人から受け取るものは何でも、それを必要とする人に与えているのだ」

農夫はうなずき、頭を下げました。

「それはさておき、おまえにあげるものがあるよ」と、ニザームッディーンは言いました。「それを売って、そのお金は家に帰る途中の食べ物を買うのに使えばいい」

農夫は見上げました。彼は、偉大な聖人が自分の帰途にちゃんと食べる物があるようわざわざ計らってくれることに感動しました。

ニザームッディーンは立ち上がると、住まいにしている所に入って行きました。戻ると、足にサンダルを履いていました。彼は、農夫の前に立つと、サンダルからするりと足を抜き出し言いました。「これを持って行きなさい。市場で売りなさい。そうすれば、少なくとも食べ物を買うお金が手に入るだろう」

農夫はサンダルを拾い上げ、疑わしげに見ました。これでどれほどのお金を手に入れられるのだろうかと思いました。サンダルは、ぼろぼろで、底も擦り切れてほとんど穴が開きそうでしたから。それでも、農夫はニザームッディーンのことを心に刻み、聖人に最後の礼をして、サンダルを手にとり立ちました。

太陽は容赦なく、ほこりっぽい道を歩く農夫に照り付けました。足取りは重く、心も霧が立ち込めているようでした。空っぽのおなかには彼を容赦なくさいなみます。20分そこらトボトボと歩いたでしょうか、彼は大きな弓状の葉を茂らせている木を見つけ、ほっとしてつぶやきました。「ああ、よかった。この木の下で少し休もう」

木陰に入り、座ろうと視線を下に落としたまさにその時、誰かが道をこちらの方へやって来る音が聞こえました。目を細めて見ると、薄もやのような熱波の向こうに、小さなきらめき——でも確かな輝き——が、自分の方に向かって来るのでした。輝く集団は、ますます大きくなっていき、その姿が見分けられるようになりました。何と、9頭のラクダとその背に大きな荷物が高く積まれた、巨大なキャラバンです。

一人の男が先頭のラクダに乗っていました。優美な絹の長衣に身を包み、頭のターバンには、ルビー、エメラルド、サファイヤなどの宝石がちりばめられていました。農夫が休んでいる木まで近づくと、ラクダの男はキャラバンを止めました。男はラクダから滑り降り、驚いたことに、農夫の方に向かって来るではありませんか。

「失礼します」と、男は農夫に話し掛けました。声は優しく丁寧で、音楽を聴いているような、そんな美しい響きでした。「ひょっとして、ハズラット・ニザームッディーンという聖人をご存じではありませんか？」

「えっと、はい。はい、もちろん知っています。その方のハーンカーから、やって来たところですよ」と、農夫は答えました。

「ああ」と、その紳士は言いました。「そうですね、そうですね。あなたなら知っておられるかもしれないと思いました。ご覧のように、私はラクダに乗っていたのですが、すると——この上なくかぐわしい香りがして…」。男は少し間を置き、そして大きく息を吸い込むと、夢見るようなまなざしになりました。

彼は息を吐き出して続けました。「これは私の師の香りだ、絶対そうです。この辺りからその香りがして——あなたから、あるいはこの木から、あるいは——」

その時、その紳士は、履物を、ニザームッディーンのサンダルを目にしたのです。涙が目にあふれました。

「おお」と、彼はそっと言いました。「それはアウリヤーの、ですね？」

「ええ…まあ」と、農夫はゆっくり答えました。どうしてこの紳士は突然に涙を流すのだろうか、興味深げにその男性を見詰めました。「ニザームッディーンがこれを私にくれたのです。市場で売りなさいと。そうしたら、私が食べ物を買う程度のお金は手に入れられるだろうということだ」

「売る？」 それを聞いた紳士は、信じられないように言いました。「アウリヤーがこれを買うように言ったのですか？」

「ええ、そうですが…」と、農夫は弱々しく言いました。

紳士は答えました。「それがアウリヤーの命令なら、私とそのサンダルを買いましょう。その代金として、これを——私のキャラバンを受け取ってください！ 私のラクダを受け取ってください。荷の中の絹、上質な油、あらゆる香辛料、宝石、黄金を受け取ってください。全部受け取ってください。そして、私はあなたからそのサンダルをいただきます」

「ここにある全…部…をくれる？」 今度は農夫が肝をつぶす番でした。

「はい」。男性の声は、きっぱりとしています。「どうぞ、全部受け取ってください」

そうして、物々交換が成り立ちました。農夫はこの運命の急展開に口をポカンと開けたまま、ラクダに登り、早速キャラバンを連れて去りました——すべての荷、絹、黄金も一緒に。一方、アミール・フスローという名前のその紳士は、彼の師のサンダルを手にししました。

しばらくの間、フスローは自分の目を信じることができず、サンダルをじっと見詰めていました。ここに、自分の手の中に、ハズラット・ニザームッディーン・アウリヤーのサンダルがある。師の恩恵、師の祝福、師の知識、そして宇宙のありとあらゆる謎と神秘の宝庫が。それらの脈動が感じられるようでした。神の息そのものに違いない生命力で脈打っているようでした。

フスローは偉大な詩人であり、音楽家であり、そしてデリーの君主に長年仕えた学者でした。国王の臣下を引退すると、彼の全財産をキャラバンに積み、残りの人生を彼のグルに仕えて生きようと出発したのでした。たった今農夫と共に去った、9頭のラクダ、黄金と装飾品の荷

——それらは彼が世俗で得た富のすべてでした。しかし今、彼が手にしたこの師からの最高に貴重な贈り物を見れば、それらは彼にとって全く意味のないものでした。

彼は木の大きく垂れ下がった葉の下に座り、そしてグルのサンダルを頭の上に乗せました。彼は深い恍惚状態に入りました。何時間も、そして1日、2日、3日。ついに目を開けると、彼は以前と同じ景色を見ました——ほこりっぽい道、あちらこちらで芽を出している植物、地平線に見える街。しかし、何かが違っていました。あるいは違っていたのは、これらを新しい目で見ている彼だったのでしょうか。あらゆる物が生き生きとして、呼吸し、脈動し——そして彼はその一部でした。それと一つでした。

彼は、身に着けていた緑色の絹で織られたサッシュベルトを腰から外しました。細心の注意を払って師のサンダルをその絹で包み、再び頭の上に乗せました。両手でサンダルを保ちながら、立ち上がり、ニザームッディーンのハーンカーへ向かいました。

彼が到着した時、ニザームッディーンはミスバーを手繰りながら、ベランダに座っていました。ハーンカーは、色、音、香りの世界の中にくつろいでいました。鳥たちは合唱をしているようで、花々は咲き誇り、日の光は木々の間で影を作りながら踊っていました。

ニザームッディーンは、フスローが頭に緑色の絹の包みを乗せて、うやうやしく近づいて来るのを見ました。彼が近づくと、ニザームッディーンは尋ねました。

「何を運んで来たのかい？」

「おお、師よ」と、フスローははやる思いで言いました。「これはあなたの神聖なサンダルです！」

「それをどこで手に入れたのだい？」

「ある貧しい旅人から買いました」と、フスローは言いました。「彼はこれと一緒に、ここからそう遠くない木の下に座っていました」

「で、幾らかかったのかい？」

フスローの胸は誇りでいっぱいになりました。「おお、アウリヤー！」と、彼は大きな声で言いました。「私はその男に全財産をあげました。9頭のラクダのキャラバンを彼にあげました。そしてそれらのラクダは、絹、油、香辛料、宝石、黄金、それからもっともっと運んでいました！」

ニザームディンは指でミスバーを繰り返して、そしてアミール・フスローに言いました。「そうかい、ずいぶん安く手に入れたね」

